

不透明さとの戦い

— 新たな課題に直面する「女性とメディア」研究

林 香里

数年前、ある雑誌で「メディア採用担当者座談会」の司会をした。有名メディア企業の「いまどきのメディア就職事情」を語ってもらうという趣旨だった。私は、女子学生の採用や女性の働き方について再三発言を促そうと試みたのだが、担当者たちは皆、口を揃えて「完全な平等です。まったく問題ありません」の一点張り。特に、その場で唯一の女性担当者が、もっともその点を強調していたのには、正直閉口した。

確かに国際比較調査をすると、日本のメディア企業の男女共同参画関連の制度整備率は高い。産休あり、育休あり、復帰後の教育プログラムも充実しているし、給与水準も男女同等。まさに優等生だ。しかし実態は、女性の割合は未だ世界最低レベル。このギャップはどこから来るのか。こうして私たち研究者は、慣行となっている長時間労働、及び職場や取材先との人間関係など、「制度ではなく風土」の問題に切り込もうとしているが、これらの情報を体系的に得るための調査設計は、なかなか難しい。

ところで、現在のメディア産業は大変革の只中にある。広告費ではネットが新聞を追い抜き、テレビはネット配信への参入が話題だ。働き方で言えば、放送業界ではコストカットや合理化の波で、いわゆる制作会社に依存する割合が格段に増え、長時間低賃金労働、不安定雇用の上に成り立っている。新聞社においても、デジタル化が進むにつれ、本体正社員待遇から切り離された多様な雇用形態で働く人の割合が増えている。そして、ご多聞に漏れず、こうした労働形態には、女性比率が高い。つまり、いまメディア業界では、職場従事者全体の階層化が進み、新たな差別が生まれている。

いま、メディア研究者には、百年一日のごとく変化のない男性優位の職場風土もさることながら、大企業から外部化され、階層化されている労働実態の解明という新たな課題が突きつけられている。両者に共通するのは、いずれも実態が外から見えにくいことだ。



PROFILE

はやしかおり：東京大学大学院情報学環教授。博士（社会情報学）。専門はジャーナリズム・マスメディア研究。南山大学卒業後、ライター通信社東京支局記者を経て、東京大学大学院で博士号取得。その後、ドイツバンベルク大学客員研究員等を経て、2009年より現職。『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム—ケアの倫理とともに』（岩波書店、2011）で第4回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞受賞。ほか、著書多数。